

## エッセイ

## 対話しない男と女

井上摩耶子

(ウィメンズカウンセリング京都代表)

私は、もう三十年以上もカウンセリングをしているが、今だにカウンセリングという手法が日本人に合ったものなのかどうかと考えてしまうときがある。なぜなら、カウンセリングとは、個人の心理的問題を他者に語るることによって解決しようとする方法だからである。

つい最近、日本の敗戦時に沖縄で日本人捕虜の通訳をしていたドナルド・キーン氏が、当時の元日本軍兵士を訪ねるドキュメンタリー番組をみた。若き日のキーン氏にとって、「捕虜となつて生き恥をさらすより死んでしまいたい」と言う日本人捕虜の「玉碎」という考え方は驚きだったという。キーン氏は、一生懸命に「生きて下さい」と日本人捕虜たちを説得し、そうしたことは今も間違いない選択だったと信じており、それを確かめるために、戦後五十六年を経て元日本人捕虜を訪ねた。

すでに亡くなっている方も多かったが、何人かの元捕虜の人たちが、テレビ画面に背を向けたまま、「捕虜になったことは、誰にも、結婚した妻にも話したことはない。誰にも知られたくないことだ」と語った。今度は、彼らのその姿勢と発言が私の驚きとなった。なぜ戦争という大きな出来事を、おそらくトラウマ体験にもなったであろう捕虜という体験を、親密な関係にある家族にも秘して、ひとり胸のうちにしまっておかなければならなかったのだろうか？ やっぱり、男は語らない存在なのか？

と、ここまで書いて寝てしまったのだが、朝方、戸外で女性の悲鳴に似た声を聞いて、目が覚めた。時計を見ると、午前四時四十五分。寝室の窓のすぐ下の道路で、茶髪の若いカップル

が向き合っている。女性が泣きながら、「あんたはいったい何を考えてるん。私の気持なんか何にもわかつてへんやろ！ あんなことして何やの！」と彼の胸を押しながら叫んでいる。少し離れたところで、彼女の女友だち二人がバイクにまたがりながら成り行きをみている。目が覚めてしまった私は、ベッドのなかで推理小説を読みはじめた。

しかし、一時間たつても一向に外の話し声は止まない。また、窓の外をのぞいてみた。今度は男性の顔がよく見えた。「何か意見があるなら言うてみ！」と言う彼女の迫力に押されて、彼は「うん」とか「おお」と言うばかりで後じさり。「何が『うん』やね。何を聞いても何も言わへんで、勝手なことばっかりして、それではガキやんか。何とか言いさ。こうしてしばいてる私の手も痛いんやで」と言いながら、彼女は崩れるように道路に倒れてしまった。さすがに彼が彼女を抱きかかえ受けとめたが……。

また起き上がった彼女は、押し黙ったままの彼に「あんたに会えてうれしかったのに、私の言うことわからへんの？」と最後の力をふりしぼるように尋ねていたが、「もういい」という感じで彼から離れ、仲間のバイクに乗せられて去っていった。

これは、馴染みの風景である。自分の体験としても、私とのカウンセリングで語る女性クライエント（来談者）の体験としても。なぜ、男性は女性の問いかけに答えないのだろうか？ 石のように沈黙する相手に声を限りに語りかけた彼女の努力の報われなさに、私も気分が悪くなった。これでは、ヒステリー発作も起きようというものだ。「男は黙ってサッポロビール？ 冗談じゃない！」と思いながら、女性のヒステリー発作の起源は、

愛する者からの応答のなさへの絶望と怒りからくるのだと妙に実感した早朝のエピソードだった。男は、愛による呼びかけにも語らない存在なのか？

男―女関係において「なぜ男は語ろうとしないのか？」という私の問いに、二〇〇〇年一二月、パウネット・ジャパン（戦争と女性への暴力）日本ネットワーク）が主催した「女性国際戦犯法廷」（以下「法廷」）が、いろんな観点から示唆を与えてくれた。

この「法廷」には、女性の視点、ジェンダーの視点に立つこととなかった「東京裁判」（一九四六年から一九四八年に行われた極東国際軍事裁判）への批判が込められている。連合軍は、日本軍性奴隷制（「慰安婦」制度）の証拠をもっていたにもかかわらず、日本の責任者たちを訴追しなかった。

そのため、第二次世界大戦後五十年もの沈黙を破って、韓国、フィリピン、台湾、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）、中国、インドネシアなどの「従軍慰安婦」の方たちが、日本政府に対して、真相究明、公式謝罪、国家賠償、責任者処罰を求めて訴訟を起こしはじめた。「法廷」は、この被害女性たちの「責任者の処罰なしには名誉と尊厳の回復はない」という訴えに応えようとするものだった。したがって「法廷」の目的は、戦時下の女性に対する犯罪、とくに性的犯罪に対する「不処罰」に終止符をうち、戦争や征服には女性への性的虐待はつきものだ、必要悪なのだという考え方を糾弾し、「ジェンダー正義」の実現を目指すものとなった。

九カ国から六十四人の高齢の被害女性たちが、次々に証言に

立った。「私たちは、家に帰っても泣いているばかりだった。誰に言うこともできない。言えば殺されるから。あまりにも恥だったから、深い穴を掘ってそのなかに埋めてしまいました」「夫が言いました『どうせ残り物なら、人間より犬のほうが良かったです』と」「処女だった私、十人の男が強姦しました。ひとりが離れるともうひとりが交替するのです。私たちは動物のように扱われました。膣から血が流れ出しました。終ったあと、歩くこともできませんでした」といった怒りと苦悩に満ちた涙ながらの証言に、傍聴席の私たちや、判事や検事までもが思わず涙をぬぐった。一人一人の証言の後には、会場が割れんばかりの拍手がわき起こった。

私は、フェミニストカウンセラーとして、現行の多くのセクハラ・強姦などの性暴力裁判やドメスティックバイオレンス(夫・恋人からの暴力) 裁判に関わっている。性暴力被害者に対するアドヴォカシー(代弁・擁護) 活動として、専門家証言をしたり、意見書を提出しているのだが、ジェンダーの視点のない法廷では、被害者がおとしめられ、セカンド・レイプ(二次受傷) を受けがちである。その意味でも、被害者の尊厳がこれほど守られた「法廷」は他にないと胸が熱くなった。

また、「法廷」がたいへんユニークだったのは、二人の元日本軍兵士が加害者としてみずからの犯行を証言し謝罪したことである。この勇氣ある行動に、被害者の方たちからも惜しめない拍手が贈られた。私の関わってきた強姦・セクハラ裁判では、加害者はいつも「合意」の上でのセックスだったと、見え透いた嘘をつき、最後まで犯行を否認する。KさんとSさんの証言

を聞きながら、現行の性暴力裁判においても、「私がやりました。すみませんでした」とのいさぎよい言葉を、一度くらい聞いてみたいものだと思にもつかないことを考えてしまった。

この「法廷」に先だって、元日本軍兵士の加害意識を聞き取り調査することになり、私はKさんとSさんに長時間のインタビューをした。

すでに八十歳近くになっておられる男性から「慰安所」体験や強姦体験の詳細を聴くことは、当初はなんとも気が重かった。お二人にとっても、そうだったろう。

Kさんの語った次のエピソードは、私にも忘れられないものとなった。

「ある日、古参兵と部落掃討作戦に出かけた。彼が『見張ってる』と言って、家のなかに入っていた。外で待っていると、彼はセックスを拒否する女の髪を引っ掴んで出てきた。子ども、の悲鳴が聞こえる。女を共同井戸のところに連れてきて、『おい、足を持って』と言われ、二人で女を井戸に落とした。母親を追って出てきた四歳くらいの男の子が『マーマ、マーマ』と泣きながら井戸の周りをグルグルと回りはじめた。子どもの背の高さでは、井戸の中が見えない。そのうち、男の子は箱を持ってきて、その上に立ち、井戸に飛び込んだ。兵隊はいつも手りゅう弾を二発持っている。それを井戸にぶち込んだ」。

ここまで淡々と語っていたKさんだったが、「今もって何としてもこのことは忘れられない。今でもゾーとする。一時は忘れていたが、結婚して子どもができたら、このことがチラチラしてしょうがない。胸が圧迫されて苦しい。夜思ひ出すと、眠

れない。孫ができて、あの男の子と同年くらいになると、また孫を見るたびにあのシーンが出てくる。ほんとに残酷だった。子どもってのは、母親のところは安全だと思って、飛び込んでいったんだね」と絶句するように話し終えた。

KさんとSさんは、「従軍慰安婦」の方たちの命をふりしほするような問いかけに対して、みずからを語ったのだ。語りにくい事実を率直に言語化し、さらに自分の感情をごまかすことなく語るお二人の姿に接して、「男は押し黙るだけで、語らない」との信念(?)を、私も変えるべきなのかもしれないと感じた。

「法廷」が国際的なものであったために、被害女性の語りにも、それぞれの文化による違いがあった。一般的にいつて、アジアの女性よりヨーロッパの女性の方が語りにおいて洗練されていた。

とくに、インドネシアで「従軍慰安婦」にされたオランダ女性のサバイバー(生還者)としての語りに、カウンセラーとして感服した。過酷なトラウマ体験を冷静にありのままに語り、PTSD(心的外傷後ストレス障害)からの長い苦痛に満ちた心理的回復を語る彼女から、旧日本軍性奴隷制が被害者に与えた深い傷と悲しみ、そして戦争の無意味さがひしひしと伝わってきた。最後に、彼女は「私の話に辛抱強くつき合ってくれたトム(イギリス人の夫)に、心から感謝する」と話を結んだ。慰安婦体験によって、夫とのセックスにも嫌悪感を拭い去ることができなかったという彼女と夫との会話は、最初は苦渋に満ちたものだったと思うが、五十年にわたる夫との対話によって、彼女はサバイバーとして再生を果たすことができたのだろう。

中国の被害女性が証言の途中で倒れ、救急車で病院に運ばれたが、PTSDによる症状だとの説明があった。韓国などに比べて、「従軍慰安婦」問題への社会的な取り組みの遅れている中国では、おそらく被害女性が自分のトラウマ体験を言語化するチャンスはあまりなかったのだろう。性暴力被害者もそうだが、はじめてトラウマ体験を語るときは、それこそ泣いたり、叫んだり、ともに筋道だった話することはできない。安心できる聞き手に、何度も何度も繰り返し語りかけることによって、外傷体験を筋道だった物語として言語化することができる。そして、この作業が、PTSDからの心理的回復プロセスでもある。あのオランダ女性とトムとは、対話を重ねることによって、この作業に成功したのである。

アジアの女性被害者たちは、未だ、このオランダ女性の心理的回復段階に達していないように感じられたが、それは、日本をはじめとするアジアの男性が、欧米の男性と比較して、女性との対話が苦手であることに起因するのではないかと思った。「男はみずからを語らない」というテーマで書きはじめたが、ここに至って、ひよっとすると男はみずからを語らないという以前に、女の話の聞いていないのではないかという疑問もわいてきた。

現在、カウンセリングがなぜか大流行だが、対話というカウンセリング手法を有効利用するためには、もつと男性も、女性も日常的な対話体験を重ねる必要があるだろう。

エッセイ

# 老木に花咲いて

中野譜庫と同志社のマンドリン

## 田中昭彦

(同志社大学総合情報センター 情報サービス課長)

二〇〇一年六月一日、名古屋市内のある墓前でマンドリン・ギター合奏の響き「浜辺の唄」が流れた。家紋に替えて楽譜のト音記号を刻んだ黒御影の墓の主は、一年前の同日に九十八歳で永眠した音楽家中野二郎氏と、氏に先立たれた純子夫人である。演奏するのは中野氏が最後までタクトを振られたマンドリン・ギター合奏団「ブレットロ・ロマンティコ」のメンバー、それに同志社大学マンドリンクラブのOB・OGたちであった。一周忌を迎えたこの日、中野二郎氏のご子息雅之氏夫妻の招きでゆかりの人たちが集まって故人を偲んだ。雅之氏は「亡き父はにぎやかなことが好きであった」ことから、この会を「中野二郎を楽しむ会」と名付けられた。参加者は、生前の中野氏が好まれたように合奏や雅之氏出題のクイズを交えて会食し、文字通り会を「楽しんだ」後、楽器を手に墓前に参集したのである。

★ ★ ★

同志社大学総合情報センターの個人文庫の中で異彩を放つ文庫が、マンドリン・ギターの楽譜を中心とした「中野譜庫」である。個人文庫は所蔵者の遺志または遺族の寄贈によるものが多いが、この文庫は中野二郎氏が生前に寄贈されたものである。譜庫は楽譜約一万五千点を中心に、辞典などの関連図書や雑誌から成っており、この分野では世界でも有数なコレクションの一つである。

日本のマンドリン・ギター界における第一人者であった中野二郎氏は、一九〇二（明治三十五）年四月一〇日愛知県瀬戸市の生まれで、二〇〇〇年六月一〇日名古屋でその長寿を閉じる

まで、生涯のすべてをマンドリン・ギター音楽にささげた人である。氏とマンドリンとの出会いは、一九二〇（大正九）年に愛知県立工業学校図案科を卒業して名古屋高等工業学校建築科助手となったとき、初任給で購入したマンドリンを独学で習得したことから始まる。結局、マンドリン・ギター音楽に魅せられて助手の職も一年半ほどで辞し、以後は演奏・作曲活動に進まれた。

主な演奏活動としては、「名古屋高等工業フィロドリ・クラブ」「ナゴヤ・マンドリン・オーケストラ」（後の名古屋マンドリン合奏団）、「名古屋クラブドメニカ・マンドリン五重奏団」などを結成して指揮と演奏を担当。一九四五（昭和二十）年から二十年間は、NHK名古屋放送管弦楽団専属指揮者もつとめられた。一九六九（昭和四十四）年には、前述の「プレットロ・ロマンティコ」合奏団を結成し、晩年はここを中心に演奏活動をされた。

作曲面では、一九五四（昭和二十九）年に、イタリアギター協会主催の国際ギターコンクールの作曲部門に入賞した「パガニーニの主題による三十の変奏曲」をはじめとして、多くのマンドリン・ギター曲作品があり、「イタリアマンドリン百曲選」「マンドリン古典合奏曲集」など作曲・編曲作品が出版されている。欧州でも自作の独奏曲集が出版されている。一方、作曲活動の特色として「一茶さん」をはじめとする子どもの歌に五百五十曲の作品がある。さらに「ソル曲集」「ターレガ曲集」「コスト曲集」「カルリ二重奏曲集」を編み、現代ギター社から出版。また「現代ギター」など数々の音楽雑誌に、マンドリン・ギタ

ー音楽の研究成果が掲載された。

中野氏は一九六三（昭和三十八）年から一九八四（昭和五十九）年まで、二十数年にわたり同志社大学マンドリンクラブを指導されている。氏が八十二歳で同クラブの指導を退かれるとき「個人に引き継ぐと死蔵されるかもしれない。また散逸をいちばん恐れる。同志社の恒久的施設で保存・利用が可能なら」と同志社大学図書館（当時）に寄贈されたのが、この一万五千点におよぶマンドリン・ギター楽譜を中心とした貴重なコレクションである。氏は常々「私の師は楽譜である」と言われていたが、一九二〇（大正九）年ごろから楽譜の収集を開始し、収入の多くを投じて内外から購入されたものである。一九八五（昭和六十）年、このコレクションは氏の命名により「中野譜庫」として開設された。



マンドリンという楽器の源流は、リュート属の一種として十五世紀初めに生まれたマンドーラという楽器といわれており、Mandolino（イタリア語）は「小型のマンドーラ」という意味である。初期には声楽の伴奏に使われていたと思われるが、十八世紀頃になるとマンドリンのための作品が現れている。ヴィヴァルディやペルゴレージなどにマンドリン協奏曲があり、モーツァルトやベートーヴェンもマンドリン曲を作っている。現代マンドリンの祖は、一八五〇年頃、ナポリで生まれた鋼鉄弦を使用したマンドリンである。複弦の四コースで、調律はヴァイオリンと同じである。奏法はピックで弦を打ち下ろす（ダウ



一部ずつ封筒に入れ、大切に保管されている中野譜庫の一部。  
奥には中野氏の写真が掲げられている。

ン)、すくう(アップ)があり、ダウンとアップを素早く繰り返し、すとれモロになる。

十九世紀半ばから今世紀初めにかけてイタリア、フランス、ドイツを中心にマンドリン合奏が盛んになったが、この頃から同じフレット楽器であるギターが合奏の仲間入りするようになり、今では切っても切れない仲になっている。基本的なマンドリン合奏は、それぞれ調律の高低が違うマンドリン、マンドラ、マンドロンチェロ、マンドローネなどのマンドリン系楽器、それにギター、コントラバスから構成されている。日本では一八九一(明治二十四)年、アメリカから帰国した比留間賢八氏がマンドリンを持ち帰り、奏法を教え始めたのが初めての紹介といわれている。

★ ★ ★

同志社大学マンドリンクラブの創立は一九一〇(明治四十三年)で、マンドリン・ギター合奏の学生団体としては日本で最も古いクラブの一つである。明治末期、神学生を中心としたグリークラブのメンバー数人が、器楽の必要を感じてマンドリンを始めたのがクラブの基となった。同クラブは一九二二(大正十一年)年にクラブ講師として作曲家菅原明朗氏を迎えたが、翌年一月、武井守成氏主宰「シンフォニア・マンドリニ・オルケストラ」が開催した第一回全国マンドリン合奏団競演会で優勝した。さらに次の年の第二回競演会でも同位ながら優勝している。ちなみに、このとき共に優勝したオルケストル・エトワールだが、第一回ではあの斎藤秀雄氏が二十歳でタクトを持ち、その

指揮は抜きこんでいると評価された。なお、この競演会は二回の開催で終わっている。

同志社大学マンドリンクラブは私演会（定期演奏会）を中心に、内外の演奏旅行、研究誌の発刊などの活動を続けたが、今次の大戦でクラブ活動を中断せざるを得なかった。その後、戦場から戻ったメンバーによって再建された同クラブは順調に発展を遂げたが、一九六〇年代初頭、今後のクラブ活動のあり方について議論がなされ、トレーニング方法の改革と専門家の指導を求めることとなった。そこで戦前に指導を受けた菅原明朗氏の門をたたき、推挙されたのが中野二郎氏であった。学生は中野氏を訪ねて、クラブの指導を請うたところ、氏は永年つとめた放送局の仕事から退かれた時でもあり、同クラブの講師を快く引受けられた。

中野氏が同クラブを指導された間、氏自身の編曲作品を含む数々のマンドリン合奏曲が同クラブの演奏会で取り上げられた。斯界での氏の功績は大きい、マンドリン合奏の佳曲が同志社大学マンドリンクラブという窓を通して多数紹介され、国内各地の合奏団で盛んに演奏されたことは特筆すべき事柄である。

★ ★ ★

中野氏は譜庫について次のように述べている。「私が同志社大学マンドリンクラブと関わりを持った期間は、私のマンドリン歴から見れば三分の一に過ぎないが、内容的には最も充実した時期であった。顧問を辞する決意をした最大の因は聴覚の衰えであるが、二十年間の馴染みの記念を何か残したいと思い、生

涯を賭して蒐めた資料を全部同志社大学図書館に寄贈する決意をしたのである。遺族や故人の所有する蒐集の末路は殆ど例外なく哀れで見るに忍びない。そして一代の蒐集は余り権威はないが、特殊なものだけに他日評価される時があると思う。特にギターの古版楽譜、コピーでないマンドリンのオリジナル楽譜等はその出版故国でさえも残存する可能性少なく、まして本邦の愛好者の大半は恐らくその姿を知っていない筈。私はこの決意をして最大の難関は、今は亡き家内の同意を得ることにあった。この為の最大の被害者は家内であることを誰よりも私が知っているからである。意外にも家内は一言の愚痴も零さず許諾。私は心置きなく大きな段ボール箱八十八箇に梱包して送り届けたのである」

今出川図書館にある中野譜庫は一般にも公開されており、身分証などがあれば誰でも利用が可能である。楽譜の検索のためには、マンドリン編とギター編の二冊に分かれた「中野譜庫目録」があり、図書館の参考図書室に備えられている。

★ ★ ★

今年三月四日、同志社大学マンドリンクラブとOB会により中野二郎氏の追悼演奏会が、京都コンサートホールで開催された。演奏会名は、十五年前の「中野二郎先生謝恩定期演奏会」に寄せられた氏の文章から取り、「老木に花咲いて」と名付けられた。当日は多数の聴衆の中、中野氏から直接あるいは間接的に指導を受けた百人の出演者により、氏の作曲・編曲作品を中心とした曲が熱心に演奏され、大きな拍手を受けた。